字大觀鈔

上

三十七

千厓文庫
文庫24
A250
1

文庫24
A250
1

大観抄序

[illegible]文字ハ結繩ヨリ
[illegible]義機ヲ活ム事綱乃如ク
[illegible]詞ヲ神代ヨリ[illegible]御書籍
川の流絶ヱハ言ヲ神詠

和訓を以て文字に屬する
事部は音韻開合自然より
備る漢土にて沙門神珍切
韻を制し悉曇に譯し大事
小事偏に法爰に無相子

真字假字の義を辨論して
名和漢の古書に言ふを
大觀鈔を拙筆に文字に
志ある者乃利便に動く
学窓に孫学の功を

[illegible]

[illegible]

寶暦三年四月晦

五條菅原爲範卿

前大納言[illegible]

和字大観録序

[illegible]

下義知[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible]
[illegible]みなこれ言葉たに
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

彼殺生のゝ合掌ハ此國の
はしをもとゝ思ふ時は
ゆゑ上人ゝ
ゝもあるに
高きの山をゝ
なを実も和
くし北陸生城

和をゝ
ゝ春ゝ
ゝれ
ゝ
鄉
ゝ
ゝ

いはゆる筆のすさひ詞のいやしきは
なほよしやとまれかくまれなるを
かのしろきかみにうつしはへるは上人
乃ことはりをかきしるすまゝに拙し
寶暦よとせの秋大江の舟のうみ
さと人龍乃公義これをしるす

和字大観鈔巻上目次

かなづかひ大意
片仮字
五十字文
横竪相生
横相同竪相通
かきくけこ相通
たちつてと相通
はひふへほ相通
やいゆえよ相通
わゐうゑを相通
真字かな相雑
片かなの本字
直音拗音
仮字反切
あいうえお相通
さしすせそ相通
なにぬねの相通
まみむめも相通
らりるれろ相通
あいうえおわゐうゑを相通

なりいろはをとゆゑ由えらお通
あいうえおにはぬねの相通
たちつてとおこそのほもよろお通
はひふへほまみむめもあ相通
やゆよわゐゑをんいきしちふれみいまあ相通
けせてゑ祢ゆめえまえ衣お通
むをかよす
いろもの化者
京の字
和字国字体雑
平かなの類字
おいうえをとたちつてと相通
はひふへほまみむめもあ衣通
やゆよわゐゑをんいきしちふ相通
けせてゑ祢ゆめえまえ衣お通
むをかよす
いろもの弘目
色葉れ文云
いろはの字体
平仮字云雑
真字体類字

和字大観鈔巻上

無相業門文雄撰

仮名字のひ大云

和字体字能と。仮名使の法。国の名実ゆて。
学我様る人を。ふかくこびあるべきわざをれぞ。我の松ぎろ
奴のくーて。だめたらは志ることかと紀ゆへう。ゆへた。
達人の影ー秘めをのれ巻虫。中古の世ゆ。京極蒙ワ
宗家つ我の式をちど先ひ。行ゆとくる出くゆ弟
傳系ー。ゆを梓ふちとば多て。世の人も皆ーるゆと
形りぬとゆや。高のいなまでどう。ゆーあや下ゆもゆまて。

ちぐりあらぎるかよ一仮名。かあづひのやうをあらんかを
おこなて。片仮字の五十字。いろはの四十七字孫理を。
ちくくワ字まくあるを一。五十字い。竪の十行相通
一。横の五行相通ふ。おのくふたるかよふるをあり。究
て低まり。いろは波の四十七字まはひふへその文字。ワね
うゐおくやま通ふ事あり。そのほひやう。神ワれさる
を。大やうあらしめ事紀とのみて。家ふこと源をこびもれた。
か邪ばの元の法ワのたて。成初る形を。仮字使のしるか
おやの北ど。ワあうゐ和の五類を。所要とするはてそのうち
いろはの四十七字を出だして。言解ワべきたあり。

言字仮字の雜

古のをきをすべて濁字を用ひて和語我濁をり。是を濁ふと
稱すなり。濁世に仮字と云ふ。ちの出来てより。ち仮字ふ
制して。濁字の名を立てあり。仮字に二種ひり。片
仮字平仮字と云。片仮字い文字の偏旁あど我部ち九
つて。その書を偏り書るもの形を。平仮字い濁字を
草書乃体を一変して和字をやり。是又真字ふひらず。
仮りあるあれで仮字と云。かふのかい文字を掐して
云あるを。見原子日本釋名か。文字のよみこえ。ち字
乃名あり。かりあと云ばきを脱して。かあと云やと。巳上

古へいはゆる仮名とかゆる二種の名ワれり。源氏物語の校ふ。
はんかんかこいへはゆる。ゆるゆるとは二門あり。はゆ
こい字の五字あり。まこれ名ある名ふ字と云。源世ふ
まれるゆるゆる稼して字にも仮字の稼ものに成ハ仮云
あるん字書を。又字書を義ふゆゆる云。義集の書籍
あれいあり。字書稼ー四種七種の不同あり。名ふハこと
し。義ふ拾穂抄ふ一譯ふり。

片仮字

片仮字ハ。諸説の抗同じく。吉備公の作ふり云。公ハ
文武。元明元の時人武。藤原藤原帝稼徳老仁の八朝ふ

ゆゆ。たびたび入唐ふし人あり。片仮字とハ。真字の一片
を。割き取りて名ふ片字と云。又隻字隻文ゆゆ云ふし。
隻ふかゆゆと訓じて。一片の義ふれゆあり。片仮字ハ和
字ふり。和字と云ハ。日本のこと通用して。異国ふ通ぜれ
ゆゆ。又片仮字を大和仮名と云ハ。和字ふれゆ形ふり。
大和の国より出れゆ名ゆゆ云ハ。ゆゆまきり

片仮字の本字

吉備公の片仮字を作れる時ハ。いろはこゆゆのあるゆ
あるふし。浅世ふ名ふ波ありとふり。浅人片仮名ふ
いろはを云ふり。今いろはふあるし。ちふ字を示さむ。

イハ伊の字乃偏を去りて作れり。ロハ呂の字より作れ
る歟。ハはハの字なり。筆畫すくなく形を文字にかなふべし
偏旁を省くに乃ちなり。真字にもあり。ホ字にもあり。
半の字を省き去ることなり。ヘはヘの字なり。二は二の字なり。
仁の字を去ることなり。ホはホの字を割
き形る。ヘは反の字を略書形りとなり。邊の字乃
下略なり。或云和板の大智度論第二十五
以下抜書。反の字をへしかなる形。往と是なり。
以下反の字抜書文へかなる形。往と是なり。トは止の
字を形りなり。ゴはゴの例を下略なり形。古へ書字なり

訓を略して用ひる例おほし。薑をねぎ。去賀茂
にはきる形なり。チはチの字を全く用ひ。訓よりなる
ちの書なり。リは利の字の書を去る。又は奴の字抜
傳形なり。ルは流の字抜省文形る。ヲはヲの字を省き
たる形るべし。手抜字を筆墨業那ごとの書かを用ひ
より。接ずるに手の字は胡の字と同書にて。ごの書なる歟。
以下はの書と書かを。ち由なるなり。手は嗅書の
文字なり。嗅ごとしごと嗅べば。外ゝ変なるはをの書かを近し。
故ふるへをの書かを用ひるなり。ち例文抜かし。回を戸恢
の反懐を戸垂の反せふげの書なるべきを嗅書の原かをの

書して讀まれると同じ例あり。ワは日の字を前文
の字形に成は和の字形より出たり。カハ加の字あり。ヨハ
與の字より出たり。タは多持字の半体あり。レハ礼
の字の草書あり。ソは曾の字乃略を用ゆ。ツは図の
字を取る形ある歟。ネは図の字の省文なり。裏は乃
書なもみくさより。曷は潅漑あれども。和語に用ゆる歟ハ。
清濁通用する所あり。地をちとし。色をくとする同じ。
子ハ十二支の中乃子城。称を州するゆえにて全く用ひざる
形なり。ナは奈の字を取る。ラは良の字なり。ムは牟
の略なり。ウは宇の冠なり。井は全く井の字形なり。

ハ二千子井三の六字なり。全字を用ひざる形なり。此六字
片仮字と名づく。是ごとくなれども。崇じて片かなと名ける
の類字なれば。此六字も片仮字と云なり。ノは乃の
字の草なり。乃いとの字形なれば。ふぬねの通音なれば。
特じ字の音ふ用ひまれるあり。オは於の字を省き
たり。於は於の字の俗体なり。クは久の字より来る。
ヤは也の字の草書やを省きり。ヽ、ハ方の字なるべし。
末の字なりと云説なれども。保じがたし。或ハ下ハ似れるなり。
片ヽ方の字なるべし。ケは介の字を省けり。ヨは
かいまれども。ほぼ如しけの字の草書なり。フハ不を省り。

コ也コ己の字あり。古ゆゑなり。工也江の彩形なり。テハ天の字あり。又亭の字ありとも云。アハ阿の字は偏あり。サ也薩の冠ありと云。キ也貴の字ゆゑより来れるあらん。ユ也弓の字形なり。メハ女の字風也。エユメ共ふ訓を用ひ。ユハ弓を下略せり。書訓に素下略せるもの又有り。三ハ三あり。み訓を用ひ。し也之の字の草出しゆゑより来れるなり。或ハ実の字を省き入れるゆゑならん。実ハ實の字を省文(セイモム)。清濁通用なる形なり。工也一説ハ口の字ゆゑ〳〵慧の字を慧と略したるなり。生(ナカ)也をうたるなりと云。私に按ずるに之の字あらんか。也ハ恵の草字なり。

平仮字にも恵の字を用ひたり。ヒ也比の半片形なり。モハ毛の字なり。セ也世を用ゆ。スを須の下を略せり。ラ按ずるふ。ラの偏(ヒ)云一旦(タン)て。片偏字(カタヘンナ)なれ共とぐく(サウ)剣先(セイ)セハ(ハシメツクル)ラるふ也ならじ。ラ稽(サキ)なり。あ(サキ)ゆゑ片字なれ作る人ありて。ラ体も一様(ヤウ)なるべし。ふ。吉備公是を折衷(セツチウ)し(アンバイ)て大成(タイセイ)するあらん。なり。実体(イテイ)の偏字(カナ)。尚少(スコ)しく古書乃中ふ稽(サキ)るものなり。ワを禾(イ)て作る。和の字なり。子を禾ふ作る称の字なり。ツを瓜ゆゑ作る。法発を下略せり。武ハ云爪也ツふ拔ず。スの字形なり。按ずるふさうの書をつゞれだ。スのまゝなるなり。サを七て作る。左乃

第四を小作りを略ちたるなり。三を口て作る。民の字を省きり。ヨをちに作る。与の字形なり。ホを口小作る。保の字ちり事化り。以上の数字古書にみえる。又ウをウて作り。ツをいふ作るる。古文ふんえ書り。

以外ンを无の字をられりんの字も无より出たり。下ハコトふ用ゆ。下の字抜除なるべし。へをナリとよむ。也の字を形るなり。すをトキとよむ。時の字の書なり。メをシテ用ゆ。為の字を省きり。下をタヽと読む。玉の字を形る。片をトキを合て一点を略きり。匡をトモを合たるなり。又權を才小作り。孫を子子作り。従をイ小作り。祁をアと作る事なり。所字書と云。

唐山ふもかに例あり。筆画を省略せる字なりて。省文と云

發を癶小作り。麗を麦て作り。義を又小作る類多し。

五十字文

所作字のはじめ為れ義より。五字文を作きり。

五書と八獲生省長唐の次第なり。是日本書紀の国なり。

仮名反の為を云。吉備氏作なりと云。又或説百済の尼法明。對馬の忠信なり。山鳥を作り。忠人を作る。虎小翔るを虎

と云ふ。へをおなじ形し。ほをいろはの名ゆゑ。

で。後人の名付て事をなる小書をなるなり。

日本音韻開合假字反圖

開合	ア	カ	サ	タ	ナ
開	ア	カ	サ	タ	ナ
	イヤ ウワ	キヤ クワ	シヤ スワ	チヤ ツワ	ニヤ ヌワ
開 合	イ	キ	シ	チ	ニ
	イイ ウヰ	キイ クヰ	シイ スヰ	チイ ツヰ	ニイ ヌヰ
合	ウ	ク	ス	ツ	ヌ
	イユ ウウ	キユ クウ	シユ スウ	チユ ツウ	ニユ ヌウ
開 合	エ	ケ	セ	テ	子
	イエ ウヱ	キエ クヱ	シエ スヱ	チエ ツヱ	ニエ ヌヱ
合	ヲ	コ	ソ	ト	ノ
	イヨ ウヲ	キヨ クヲ	シヨ スヲ	チヨ ツヲ	ニヨ ヌヲ
	開 合	開 合	開 合	開 合	開 合
	喉	牙	齒	舌	舌
					齒舌
	開淺				

	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	ア
	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ (バ)	ア
	ヒヤ フワ	ミヤ ムワ	イヤ ユワ	リヤ ルワ	ヰヤ ウワ	
	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ (ヒ)	イ
	ヒイ フヰ	ミイ ムヰ	イイ ユヰ	リイ ルヰ	ヰイ ウヰ	
	フ	ム	ユ	ル	ウ (フ)	ウ
	ヒユ フウ	ミユ ムウ	イユ ユウ	リユ ルウ	ヰユ ウウ	
	ヘ	メ	エ	レ	ヱ (ヘ)	エ
	ヒエ フヱ	ミエ ムヱ	イエ ユヱ	リエ ルヱ	ヰエ ウヱ	
	ホ	モ	ヨ	ロ	オ (ホ)	ヲ
	ヒヨ フヲ	ミヨ ムヲ	イヨ ユヲ	リヨ ルヲ	ヰヨ ウヲ	
開合音	開 合	開 合	開 合	開 合	開 合	
五音	脣輕	脣重	喉	舌	喉	
七音				舌齒		
喉音淺深開合			開合 淺深		合深	

アワヤ喉(コウ)タラナは舌(ゼツ)ハカ牙(ゲ)サ歯音(シオン)ハマは唇(シン)の軽重

右歯の数ふ事あり。五十字を五まとり配当する事い。
人こゝよく考へあり。考うりとゝのへども。舌まるふ三川。喉言ふ三
川。唇言ふ二川あるゆへ。何の所用あるゆをつまへ知る人
ある事をきゝたい。私ふ按ずるに。五まとりつゝ。五まとりつゝ。相
わのもたるまゝ。考を七まるあ。きれて。悩みをこゝろ分
こゝあることゝず。ゆえを七まるり。口のてばこ舌中より。
半舌半歯の二川をつゝ。北いぐ才ありらを留れろを。舌
歯言と名付。あふぬ和のを。歯舌言とすり。ゆえ
の所。いまゞ七まるの所法あるまゞきれぞ。まるの割符ハ同ど
なれだ。七まるをいて是をつゝ。ふ。少しも遠ゆ。あ

こゝ言を限め作りて。
口の喉。だ舌が牙さ歯ら半舌。ふハ半歯にてはまハ唇言。
はゝこゝ。舌まるはこ和美別の所ゆ口ゝ。唇言まる。
ゆこゝ。極唇重唇言。類縁の上ふも二品つゝ。
し来るゆれだ。甘言も一探ふ。和言もはハ多へ。
ゆみ也名ゝ。極重二口。口あり又喉言。地ゞて
言ゆ根本。口喉より出る所ふ。喉言ゝ生る所おかき也。
あゝふ牙歯舌唇ふつゝ。つゝれたる言を除きて。残る
言の。喉ゝ言ゞ。別ちがゝ紀ゝの三川。口ゆいゝを。
やいゆえよ。つゝるゝれあり。その中あいゝえをハ開乃

こゑなし。輕(カロ)く外(ソト)へはなちいだしてあり。口ひらき唇おもて。合せる聲
なし。重(オモ)く喉にせまれる聲なり。諸(モロ)越(コシ)金(キム)の韓(カン)唐(タウ)將(シヤウ)船が呼(コオム)聲
集(シフ)韻(イン)し。深(セン)喉(コウ)淺(セム)喉(コウ)と云ことをもいへり。その後いふもえ
をこそ淺喉なり。口ひらき唇むすぼ深喉と云ものなり。すこし
やいゆえよハ半濁半合にして。淺深に通ずるなり。舌を
こゑ。唇(クチビル)をとづるまで外(ソト)へ出(イツ)る聲なり。合せは。唇をすこし(スコ)
かくして内へ入る聲を云なり。牙喉舌三音の中にて。
いうゐの三ツ。同字にて無用なるやうにみゆるなり。是
を以ていろは四十七字文の肝要(カンヤウ)とせり。右にかよふ
のいゑをあげて。それらの外にわかるゆへ。かよふの

いゑえを。やいゆえよの終に於さむ。うに承よふいゑえ。ゆゑ首に
いゐの字は。下より濁りびらくにをるを通じ。又ゐ字二
川あるとては。ゐの三ツの中にあるゐ字をかくる事。聲
聲なし。喉(キ)よりに口のわる。運(ウム)雲(ウム)などと云。音(オム)のかしらに
ゐるうの字。又うきぎ鬼うぐひす當などと云。訓(ヨミ)の頭(カシラ)に
あるう拗字などの類是なり。口ひらき唇むすぼの中にゐる
うの字を。東(トウ)教(キヤウ)(カウ)などと云。音(オム)の下に入りて。むのひびきに
ゆぐふう拗字。ゆまき訓(ヨミ)の下にゐりて。うれしう嬉めづらしう
珍などと。むしくはかふ時に用るうなり。又此中のう拗字は。
時によりてふの字とかよふ事なり。こゝにかうなどの類も。

入聲の書かも。たふ答かふ合ゑど出くもり。訓あしい。
ひさぐふ淺茅生よもぎふ蓬生あど書て。うの形きに
よもむもり。見きはひふ夢ほの字。ひねうるおかふふう
ひるあふうとふこ通ずるもり。ちくふひるうとひあ
あるうこ。狂金同じのうざれど。二形ふうの字を找きる
もり。ちうれだ。ひねうるおれの一形ちを。書い字面のごとちれ
ども。字ちはひ姫あれの半を帶うる形り。あふ々の字
ふち。私ちひふへれの字を。書きくちへを。ちうしめ
たり。嘆書いかくぼうりゆ。持ちれ那れて。あひやの三形を
ひうてるれ里。い井ちれうるい。ちとより經金同じ

こうず。見うちをたうひひうふを。偽字仮の大事ニたるもり。
かちづゥ元の大事いたゞ嘆書ふひり。はあふ嘆書るふ。あひ
やのニ形ちをて。ちうも出書の好字ニ中ニふ那字セり。源
氏ニちりひるるちをちうぐ。又世流布孤五十字文
ニ。いるちれえるの元ひを。ひやはるるひり。よくく
吟味すべし。ひうくし変様當出ていれるの本ニ元ち
ちるるる手ニし。

直音 拗音

ないを字ひを書るの五十字ち。四書ちり。見ち乖書ると
云。又ちくのちるのちり。イヤウワあどのかふを付け

たるハ。其孫つゝの直音。少しひずみて変ぜる音を。拗音
と名けて付け悪たる也。是ハ開合二種の別あり
て。大書て泥さうなる也。拗とまた字書ニ於絞反折也
拉也とありて。すなハちあらざる所の音を。拗音と云なり。
たとへバ。あの字を。おもれ哀ちぎまぎ称ならず云ふを。
直音なり。いりあひ入相とよべど。此の字粘じてやの音
ふくなる是イヤの拗音より成なり。かあい可愛と云
をも粘じて。かワいと云ハ。ウワの拗音に移れて。いとなれり。
餘の此十九音も。おなじく。拗音ニ開合の二種あり。
右の方ニ。イヤイ、あげたるハ。開の拗音なり。左の方ニ。

ウワウ井あげたるハ。合の拗音なり。又つゝの形ニ。第一第
あかさとあるハ。根本の音なり。各第一の音より。二三の音を
生ず。それぞれくの二三段左右あるへて。ウ井 ク井 筆を
し。その下ほど。右の方ハやいゆえよを置き。左の方
ハワゐうゑをを添ふ。是十行にて諸同じ。
横の第二いきしちにひみいりゐハ。第一の開より生じて
半開半合の音なり。是一変あり。第三うくすつぬふむゆ
るうハ。第一より生じて。合とある再変あり。二三ともに
変じてる音なれバ。自然に拗音のかしら形るなり。又
喉音ニ三行ある中。あいうほをハ開音なしあるなり。

第一の行ふ所りて横の両り垂るる乃顔くある形りやいゆ
えよ。口るうるるれの二りを喉の含るりて。サー変じ言る
言形り有ふ物るれ顔くちるるあり。生中やいゆえよい。
開合り通ずる形り。物中の第ろー。口井うるおを合と
すあり。一切の言い喉を言るを本こー。又喉を言るー三行を
えてらも。ふてるいれゆるる。源く言次屋ー。

横竪相生

あの一言ゑ。言ゑ根えうた。をよ我と人の口をれきえ。
音を生するゆるそ。かあるずあの言形りそれよりして。
サー唇を揃みて。歯ひく舌を解れいの言くあり。

又唇を含まれだう孫ある言形り。又いの言。ゑ形を解
きて喉ー入るれだ。口の言とあり。うの言を喉ホ入る
れだをの言とあるあり。言のれだ。口の一言より。いうの
二りを生じ。いより口を生じ。うより口を生じ。これ
皆唇を合呼吸の際ひ有り。唇合を口を唇ると言と
合口とあり。呼吸と。外て出る言を呼とのひ。内て
入る言を吸と名づく。かきくけこ中ーすやうオの九
行も。みなくあいうえおを同じく。一りここを生じ。二
より口を生じ。三より口を生じ。四より口を生ずるの言ありと言ひ。
又横のあのさたなはまやらわの次第ハ横ようより書き

ふるるあり。ゆくさ。嘆息留の意なり。口を形つくる
種く出る意なり。たゝの二川也。古のほゝゑむすゝ
用ゆる意なり。はゝ母。姉妹。ゝ義あり。やゝ
わの二川。唇と言と言くゝゝゝと意あり。月経を種き
より。抜きふいて除く意なり。十あを。十意なり。十
形あまてゝも。もと姉妹一川の所いゝ口ゝ戒よりいで。又あい
うえをふ拝る意あり。第一拝樣の所より生ずる意。
かゝゝ形はまやゝつゝまに。ぬくゝ引けて。ふ所の記きを傳く
たる意あり。第二のいきゝゝちふ記みいりねの十字。いより
生ずる意あり。みゝくゝ引くゝ意ふいの記きゝ所ゝ意あり。ずと

うゝくまゝ川ぬ姉むゆゝるうゝ。ゝより生ずるあれで。みゝく
引きゞ意あり。うのひゞきを拝きまくゝ意。第四のえけを
称度めえき意のゝゝちゝ意あり。ゝかゝゝゞ記のひゞきの所
ふ。記の意より生ずる意あり。第五拝ゝゝゝのひゞきの所
拝意。をより生ずて。引きゞ意みゝを記きの意あるあり。
ないうえをの文字也。一切意夢の記きゝあり意あり。
ひゞきゝ所。顔意。拝字ゝ所文意を夢多ゝめゞく。
摩多ゝ云。顔の義あり。その五十字。拝字意昌云
乃意あり相似ゝ意。ふ法象の法勝ふ。みゝゝ意。意曇
より生ずゝたるゝいゝ意。拝れゝ信ゞ意ゝ意ゝ

なりき。五十字文は吉備公作りたりと云。されども日域ふ
椿字は学ぶべしと。字多海師の作来れり。新羅渤海の
使代りの始まれり。吉備公の時。書法あるべきなれば
五十字文は悪筆なりよりふは。ただ。あれど。悪筆
なりつり筆をなせるなどくちなるは。書新身法の妙
あるべし。蒙国同じ。されどあるべしへ。ふ七なるの
渤海も。吉備公の付あるべしどくれど。母。身法と書事
かれへるべし。なふなの五十字は解くるは。悪筆
まるべくなきなれば。よくなるべきなるべし。又横の
第一なるべきなれども。なるべしはつ。五十字なるべし。まこのべきべしち

にたるみなり。井也。半一毋半合なるべしなぬは合。
第四天巻勝て。ほき書一毋書合。第五を巻とその八合也。
ずと竪を書べし。横を新と稱すなり。日本の書法
はたく一毋合種重のみめてすべきなるべ
偽字反切
かふがくしと云なるなりて。五十文の國ふて反をするなり。
反すべき二字の中にて。上の字を文字といひ。下の字を母
字と云。ちをくふ。横竪本字竪留末文字上下母字
横竪云なるなり反切するなる文字母字を此号なるて
みるべし。二字ともふ横の国形あるべ。文字て作。二字ともふ

了嗟の風俗あらば。毋字に殺する。機帰本豎笛未
こと云あり。たとへば キ井ちを反さばきと形り。ヨコを反せ
バヨと形る。横殺本字形り。又タテを反さバテこあり。
ム三をかへせば三こあるハ。豎笛未字あり。ずこキエの
かくしハケこあり。ツアの反さタ半形る。鈴さ又字
乃上あて下あり。毋字の横通イ。鄭字を。帰字を
するあり。是を又字の上下毋字の横と云あり。和漢の
あーを試むること。いづれも遠ふ事形し。消ぬべうり
なること云。賢者をけぬべうり。考えのかくし
けあれば形る。あそうみ淡海をあうみこと云ハ。はうを

反さハ形こあるがめし。又字毋字と表。笛書あれば
たぐふ。ちー。ちー。柳書の字。義ハ下り祝ぎ。ハ
ゆる字を。かーらぐ。かりきりて。ちりて加へせば。たぐふ事
あり。字書あぐ。ゆる系の。濃字。書ー。はけこる反切を。
はぐ。はけ加へすこ。撰りあり。方我の反風の字。ちぐこき
ハ。ひこ。書ーありて。西書ふかりげ。かぬこあり。時ふ。
二こ相通こ云ふ。を。こ。ー。の書あり。こ云ハ。俗こ
あり。時こ。ありて。二字あ通じ。二字。是通じ。二こ云
相異ず。あれ。はひふ。ふへほ。皆同じ。ると
あり。書。差別こ云ちぐこ。はあ。はふ。濃字の

音紙のごし。相通を云ハ。大ありのやうにこまゝべ。類出字音義切音切ハ新撰字鏡あり。多物すべし。後して多字文字あるもあれ。此同音をたゞ仮字をかへすばかりあれど。かゝる反とゝふなる事し

横相同音相通

多字文の上下を略さし。左右を横字。四の字形。それぞれの一行五字おなじ。横の五字。各の十字相通ずるもあり。こゝ音をけまばあり。音を横相同音相通と云。又同音相通同類おなじ通ずるを云。此の一行五同音ゝ云。唇音舌音喉音の一音づゝあれど。横の十字を同類と云。ひのひゞきいのゑゞを皆同一なれどあり。四の五字皆〻混雜し。横の十字すべて通用すと云ふなり。時〻ありて。生中に一二相通ずるもあり。お通の事ハ。下に出ぬ。こゝにてし。

ひのいうゑを相通

うやゆふ敬をいやゆふとし。うやくし恭をいやくしと。すゐ新同音相通あり。又うは魚をいを。草子物語など。ゆをうを書しもいをゆのあゝひあり。又下ゆうて。いゝイ通ふあり。近ウイ 青ウイ 白ウイなど皆こゝにいはず通あり。○ゑはをと少し。こゝろうるとよもろうはを通あり。

をぐるま　貴を賤ぐるまの類。又同じ　○こゝ賤ぐるまの遠里
小野　八橋の玉乃名所形り。をのと云ふ所を里人とも
うまうのとゝいふ。をうまうお通あり　○あふ　逢　あふみ　近江
ひのあふぎ　扇　ひのあふぎ　檜の数。あの字抜き。をの書り　あを
相通あり。是あふ云ふのうに通ふのいえ。ひのいろをお通あり。

かきくけこ相通

かふ　貫　かふる　更　かふ　飼の類。たぐふ　遠　ほのぐふ　紛　かはち　河内
すぐ。かの字抜こ　ほ書ふ　傍　ほかと相通あり　○　奇　クキ
　ク　説　クキの数。きく相通　○　ほこ　鋒　ほこらし　藁　をこらべら
こし。だいとく　大徳　だいとこゝ。雄略山こ書し　おとこ

やまとこゝもの類こゝあるお通　○　ゆふつきよ　夕月夜　をゆふぼく
あとし。ぼくえ　案　を博奕　えとすぼ　数　奇こ相通形り。

ぼ　ほ　す　穂　ぼ　ほ　相通

あぐこゝへ　准　を形ぐこゝへこし。そさのを　素戔雄　をすぼのをと
ぼ　ほ　数。すこお通　○　そく　副　をこゝ　そすぼ　ぼ　ほ　お通　○
　奏　スレ　通　スレ　感　スレの数。ぼ　ほ　相通　○　行　ギヤウ　スセリ　申　モウ　スセリの類
ぼ。すも相通形り。

たぼ　ぼ　てこ相通

て　届　ぼ　ぼ　手枕　をたぼ　ぼ　ぼこし。てのごひ　手拭　をたぼ
ごひとすぼ　ぼ。たてお通　○　たふ　任　つぼふ　傳　うたふ　謡

あぐ。たの字をそふらもあり。たと相通○耻ツチ怨ツチ苛ツチの
数。ちつ相通○ちをて乖絲をそらぶてそ。そ素をち
きとすちをぢ。ぢと市通○たのまい松ぬをちいまつをち
るいぬい相通あり。

なふぬねの相通

をぎあふ補をけぎぬふそするい。あぬお通○ふをそ布表
をのをそ。曙義をのふきんそまみ。かんあり煩悩を
ぼんのうやそら。あるいあふ出納をあるのをする数。ま
のあを○ねぬと狗子をあるのとそ。のぐふ拭をぬぐふと
ふるいぬの相通○ふるびと貧人をぬふぐふぐふあを。

ま祢相通形りの。

はえ姫を相通

ハ子ハ曙ハ漂ハの数。甚ぐ多し。えふへ相通すれど
ありふの字あれども。をそうを通ひてよもるい。そひふへか
ハのうあをそかなへぐ形り。○植ハ喝ハ考ハ代ハ
捌ハの数。ふへ相通にて。皆ふの字をうそよみてつうふ
あり。うゑる植かゑる代をかく。あてのうに○はへ帆をた
ひこ。かへ虫蟲をかひるとし。かへで楓をかひでを
するそ。ひへ相通にて。ひとねをうえたるなり○たふ
夢いそふ祝あぐ。はの字ふ。ちかうをし。又ちりをぐをを。

はかり相通ずし。ちりおのこをこめてまぐさありし。ものぐるひき相通ず。ものぐるひきするも。まこと同じ。○おもふ思ひまとひおもひくるしむ相通。又おもかなるいそなるはしるし。思ひゆるいそなるはしるし。又こころ体をしるふ。爰のふぢゆえ。えぎかふ。ふもゆるこう。体傍相通。たられとよもぎ。ぼうりをこめれば。かへるとすぶ。ぼ色相通。かりるとすべらす。○つぶ粒をぼがとする。ぼうる相通。○ぼういろ。紅色をにびいろ。ぐあるいろ。ぎゑ。面いちひふ相通。ちゐ利。

油美むめ毛相通

いみ忌をいまくしこ。ぶむ。いきり。いまる。舞居こすりこ。

ぼみ蕾。めも相通。○ちもる。裏をぼめかれ。手する。

ぼもめ。おる。○袴むぐろ。袴をころとす。ぼ。もも相通

○はもぼ。入をはめるとする。ぼ。ぼ。相通。○かみ上をかん

こ。ぼみ文をふんこ。神(カミ)を。琴(キン)。琴(キン)の。琴。又歌(ウタ)。讀(ヨム)

ぼ。みも相通。○たまふ。賜。ぼふ。舞。かまふ。樟。ぼを。ぼ小

ちもぼ。ぼも相通。

やぶ。ぼ。兄。与相通

遥(ヨウ)。要をこうとこもぼ。やこ。ぼ相通。○孫(ワウ)。黄をゆこうと

し。高枝をゆ者とするハいゆ相通。雄勝有力由の類。
ゆうとよむもハさわ示じ○消エ越エ聳エ蕭エ費エ
乃類。えゆ相通○をゆび小指をもよびとするハゆよ相
通○かや榧をかえさするハやえ相通あり。

羅里るれろ相通

別ル離ル ハ。ぱれお通○悪ルシ軽ルシ ハ。るろお通○
備リ去リ ハ。ぱるお通○嫌ハ婚ハ ハ。ぱふ
捕ら。らの字ろふらむ。らろ相通○割リ裂リ ハ。ぱ。
ぱるるまお通○坐を。をらんをりをるをれをろと。
いへだらりる裸ら時通ずハ。ぱあり。

和井うゐ相通

王を。をうとよむもの。わを相通。人皇王ゐ。ぱ。ぱ小樽じ。
仁和をにんわとすハ。ぱあるまをハ。ぱまやらわの横通あ
きばあり。

阿ア伊イ宇ウ江エ御オ可カ毛モ奈ナ加カ
可ケ祭をかわいと立彩あり。尚祭ふ毫じ。

あいうえ我さやゆ相通

ぢ海ひ出合をでやひさし。ぱあふ仏合をぱやふ云の彩。
やゆの相通○たゆ示任をする流をたゆる流をゆる
たるるとよむ。ゆお通○弥生をやよひとする。

をよおなじ通あり。

いかいかに紙とたまはせてまうあ通

入夢のたまる紙ぎまいかるたらけ。あいかうえをの毒。たちつ

てとふ勢ずるゆいかり。隔蓐をげったんう。ばゝ井ムまをはッ

ちんう。善男を佛性をあッうぶ川あるうう。別業を

魔うてんうう。千万音鈴ぜりうんとあのごとし

あいかうをを毒ゆあ世稀業お通

ほぬるまる拂ちらい。あいかうに鈴鈴ぐまる。おらぬぬのと

ぬるゆいかの。善男をぜんあくとし。延引をえんけんと

し。勝軍をけんぬんう。関縁をいん稀んう。親毒を

くうんのんとよぶの数是好り。

ほひふ魔ゆとほえもむめも相通

ゆむり尿をゆまるとし。せばき狭を長廣とするハ。ま

相通○さびしき寂寥をさみ〳〵毒とし。むゆび睦をむつを

とするハ。ゆみお通○ひのそれぶ情をあられむとし。えうぶ

樽をえうるとするハ。ぬゆ相通○をゝあべて楽をを〳〵

おあるとし。すべらぎ皇をすめらぎとよんハ。めわ通○お

ぶるを鈍おるとし。ひぶ絶を絶ゆとし。ぶゝび憐

をとゝゝびとすゆるとし。ほも相通あり。

はひぬあゆほとつぬうあ相通

詞のてゝはりてゝ。そひふへほ清じて口并うゐれとゐ所あり
てにはの所。たゝ字を口とゝもむ口の唇はあごのごとし。又枇杷琵
琶。秋半。嘗蹴あご。はの字を口とゝもむ。はつ行通あり○こひ
恋。こひ問。ねこひ思あご。元をおとゝもむ。土肥。甲斐あご同じ。ひ
ね根通○ゆふ結。ぬふ縫あご。ふの字ゆうとゝもむ。泥鰌。丹
生あご同じ。ふう根通○まく苗かくる。帰うまく憂あご。面
をあり。傍。所色あご又同じ。面色お通○いとゝ蚕か
ほ新おりふ震あご。ほを打うよ舞。佐保。浪。波あご同じ。
かわ根通すれどあり。

あかたゝ赤はまあらつ根通

暁日者をさく者ゝとゝ云。はさつ行通○漢和をかんあと
すり新。なわ根通○善悪をぜんはくゝう。三悪をさん
あくたゝとすり新。あは根通あり

いまし地ふひ毎みゝるゝるお通

ぢいぢ雑。はまぢあり。巣さいのゝも。后ゝる。はき床孫。ゑんも
あり。かいまゝ見。頃見。はかき陰みあり。ぢ新いき根通○喜
樂の類。ぢきしお毎○はゝ井のはゝちんと形るゝも。同類の
横根通あり形事。

宮ゝ原川ぬふ毛面るう根通

ゝとゝ川。義をゝとゝづとすゆゝ。うゝお通○たゝ千。永花

こえぬの影。すぬの通○嘶ユフの影。ぬの通○慶スルあど。
ぬの通○あるのたぐ夜神殿をよんのあぐあぐらのき。
むるの通○擦彼をたぬきころぬ。むぬ通○たつとぶ
をたふとぬてする。ぬ川通○うらぎ五茄をむらぎこ。
むめ梅をうめこ。うバ祖母をむばこ。たくむかみ蜜紙を
たくうがみこする影。うむ通あり。

ゑけ物て祝屋ゑけきゑ通

鑽くをゑんゆんこ。繁業をはむ祝ゆと呼ぶ。ゑ祝れ
通○佛蕊を台蕊ぶてこ。花通別園をさつべつ
てんこゑ。ぬこゑ通あり。

きをちとのち母ちゑ於通
かりより暢暢をかふりこゑ。ほもお通○ちる青青を
ちんぜりちんこすぬ。をと通○盛盛をかんのうと
。機青紙ちんのんこゑ。をの通用来。

むをはこす

鑛を云ゆ。こ。紫紫をちをふ。。綫をぜはこ。
雜彼をちゆはこする影。陸丹むめもなゆ勢祢乃ふ通ひ
て。こゑ通すあり。通ゆりい美あり。式例ゑゑゆり。
以上のお通。只二緒を永のこあり。ぎ。く家ふ見きず。
あんこゑおもい影ををして考ぎ。

いろはの題目

四十七字の假字。いろはを以て題号とする。先書の
詞の字をおりて題とする例なり。論語の學而篇など
を。篇目とするに同じ。されどいろはを号とせるるのハ。
その意あきらかなるゆゑ。いろはと云ふ。ほの字をつゝまみる。
毎のちなみなり。字をかゞとなし。母をいろはと云ふ。スベて
唐世よりの事なり。関云ふを字注とされど。四十七字を用
ひて。一切の詞をほゞらぼと云ふもあり。ろゝび書詞の母
あれど。いろはと名付くるもあり。母字と稱ずべし。ちなみ
素讀の學者を字母と称し。字母ハ七字の三十あるを

字母字を稱するのゆゑ。その字ハ。日本の字母なれど。字
母とも母字とも稱ずべし。

色葉の假者

假者ばかりあるゆゑ。いろは書も始り。又おくにハ弘法
大師作りたまへるとも云へり。大師入唐ハ。唐の假名ありとの
說あれど。信じがたし。所くにハ帰朝の後。言語を山を学
び。唐へ渡りの假名あるゆゑ。始めの言野日記に書きり。
と詞ハ。如何高野山にのぼり。鄉元入定の處にて。ものをう
れしく。夕陽象といふ所にて。星の立けるハ。大師出山をきり
初めこのを孫ひて堂をたてられ。本のたくみ。

文字の事を志るすなれば。志るしはじめはいかなるべきものぞなれば。まづいろはの四十八字（八の字数にハ七あまり）をもて人に知らせ玉ひしより。すゑの世の人のたすけにもなりければ。今ハ何かまして人をあらん。往古ハ仮名の事ありきや。仮名おほけれバを借て書る人まれなりしバ。事ハ世載を待る。又出雲国神門郡塩冶の神門寺に。弘法大師真蹟のいろはありて。寺宝とす。又石にも刻みて。いろは石と名づくるよし。世の学者の字考録に出たり。大師の作なる事勿論ふ。

いろはの文字

いろは歌は。涅槃経の諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅為楽の。四句の文の意をとりて作りたまへりと云ふ。色ハ匂ヘド散ヌルヲ。我世誰ゾ常ナラム。有為ノ奥山今日越エテ。浅キ夢見ジ。酔ヒモセズとの。四句を作りたまへり。是を略して七字づつにわかちて。書のごとく読ましめてば。いふべからずの義あるをさとし兆。又今よみては。此ふたつの文字。いろはを元として。いかなる事をも志らしめ。いろは四十七字の外にありて。誠に字の事に待る。かく深重を志らざる人の。いづれの文字かさがりて。無用の事なりとやうにおもへる。いと

ロ偽（ギ）ーなどもある歟ずや。

京の字

大師の真蹟（シン セキ）ーハ。京の字ありーと云へり。源人（コウジン）加（カ）へ云ふ。京は字を加へ云ふ。

一説ー偽（テン）敬（キヤウ）大師之を加へ給ふ云ふ。

ケ様ずりー。いろ歌のまくらーし。偽字（ナツセヒ）歌のやうー。大方（ヤウ）い知れ

ぬれども。合字（ゴフジ）のはなれーー。はかふ京の字を立て。

きやうの三字を合せー。京のまるこゝろ。はたらーーみくく。

よ詠ず合字はなを。ロ偽ーをくへたるあ〻ゑ。

よろづの字おかき中。京の字ををくゝ。みやこ上（タト）

の義ありべー。又一こゝより百千万偽まーの字。ちはふ

二ゐ字ーあけ里。是も字のかゝを用ゐるゆををくへる

あるめ。いかーいを社ふ所ふるとよみて。その偽字歌ロ偽をる示

歌ーー。又神書ー。つより偽まーの例を。ひふみよいむ

なやこゝろらとも侍ありー。

いろ歌の字籠

いろはを和字なり。和字ハ漢人よりはさはれ歌ゐ。

もと是漢字ーり出れども。てをもぐ全一巻ーて。

和字と和歌ありー。い和字 以漢草 以真字。ろ和 呂漢

呂真。は和 波漢 波真。に和 仁漢 仁真。ほ和 保漢

保真。へ和 反漢 。と和 止漢 止真。ち和 ち漢 知真

○り和り漢利真。○ぬ和漢奴真。○る和る漢留草。○を和漢遠
真。○わ和漢和草。○か和漢加真。○よ和よ漢与真。○た和
た漢太真。○れ和れ漢礼草。○そ和そ漢曽草。○つ和漢
門真。○ね和ね漢祢草。○な和な漢奈真。○ら和漢良
真。○む和む漢武真。○う和う漢宇真。○ゐ和漢為真
○の和の漢乃草。○お和お漢於真。○く和く漢久真
○や和漢也真。○ま和ま漢末真。○け和け漢計真。○ふ
和漢不真。○こ和こ漢己真。○え和漢江真。○て和て漢
天草。○あ和あ漢安真。○さ和さ漢左真。○き和き漢
幾真。○ゆ和ゆ漢由真。○め和漢女真。○み和み漢美

真。○し和し漢之真。○ゑ和ゑ漢恵真。○ひ和ひ漢比真
○も和も漢毛真。○せ和漢世真。○す和漢寸草。此中
にゐゑの三ツを訓を用ひたるあり。ゐとゑとある字を略
きり。或説に土衣面孫字なりと云るは僻事なり。ゐえ
よまての字をのちに書り。○止江女の字をとえめによみ来れり。
土衣面の字を用ひたるはなし。○萬葉集の真名字に音を
訓とかくべく用ひられしを是等よりて仮れり。○訓を
よみに假しまじくもなれ。○又へつの三字に草の筆説
多し。其中へんの字の省文なる事。○片假字の中に弁
ふのおとし。○つを門の字なるべし。○片假字のツ此字ら明

らのあるぬやうあれど門の字の草書門の字と同じ
つゝ作りつゝ作るもあれど片假字のツも門の字もくんと
おもひて つの字を作り誤ふあらん 流れ筆草集ちど
う 川の字をつゝ用ひたり 津と同じく訓じ来れり 故ふ
いろはのつハ川の字なりといつたり 是信じがたき流なり 川の
字つゝ作る所きいてれかし 津をたゞの義又いつまふ
あどの略なり つゝ川ぜり 川をつゝ訓ぎるもおぼつかなき
たるなり かつゝ門の字 草書つゝ作りたるを川の字と
誤りたるなるべし いろはのつゝ門の字とするをよしとす
所〻門を唐翁都豆の反つの音なり 又仁いにん 保を

ひう 及ハへん 遠ををん 太をたい 礼いまい 曽ハそう 孫ハまい
太ハたい 良をらう 未をまい 計ハけい 天をてん 安をあん
者はをう 世ハせい すをすん 和ハをを下略なるなり 是又古
なり下略を字なり用ひ来れり 草の中
及をまをん 良ハををう すはををん なるをを 〻く誤り
来りて 所をらうすん 所をを所なり 又りハ利の半体 片假字
を用ひなり りハ力の字なり 又のをるひなり 飛ず 乃をを
いのをを移ぎるなり 今を和字なり 所をを
かをを ず 通用を所をを 潮とすべし 又生字小出をを字
その近来ものをを 俗字なるも 生をを小出をを

一も所伝を論ずる拘(カ)らず。

和字國字の辨

いろはの中。ナヽ漢字草出のまゝある字なれども。こゝ
わゞ國の素体。雛形(レイ)を学ぶも所ふ。身(セン)後に伝乱し流れて
和字となる。ほのふ漢土(モロコシ)の人。いろはを見て一字も違ひ
なくば。又他の字をもまぜ。うゐ〳〵倣(ノリ)て。倣字異
字。又は日本の國字など移さり。書史會要に載せる体
など。傳〳〵て語り。奇怪(キクヮイ)なる拘こゝろあり。是をつきまぜ
らぎ所出せる。唐土(モロコシ)の人のかけるいろはありとし。別伝ある
やうに覚えくるる人多し。唐ちふ和字なるゆえ。ひゞ

國の文字を傳へあやまりたるなり。是いろはなり。
いろはは漢へ上ぼりなる此わかなたれ了法
なきをしらぬのれまくやけふこえてあさ
さきゆめみしゑひもせす

出典考証に云ふ海道記などに出る所。ゆめ一ハ不見ゆるなり
まの字ハ。ひゞれも語りて。だくの間に入れり。又和字の
國字なる。乙(テン)乙(テン)の梵字(ボム)。篆古字(モウコ)。難字(ダウ)。朝鮮(チヤウセン)の諺文(オムモム)。阿
蘭陀(ランダノシ)字などハ。その表〳〵なれ。新(アラタ)に出(シツ)たる國字なり。
本邦の國字を漢字の一変したる物なれど。能(カ)なの表
字〳〵同じくなる。此所ふ偽字(カナ)とこひあつハきり。

平假字ニ云ハ

いろはを平假字と稱する由。本朝學者云。平易乃義ニ云。今按ずるに平均の云和歌男女平均ヒトシカラ用ゆれば也。片假字等字ニ。女子使り始ざる かゝられば。そのいろはの母ハ男書きを以て。平均の云ひし平假字と稱やるあり。土佐日記ハ云。等字を男文字モレオトコと。平かなを女文字ナモシヒラカナといへり。

平假字の類字

以伊伊吳異。呂呂路路恠爐。葉葉葉乇者半末半半ヲ盤ハ八。ホ不了了耳丹丹ヲ于

ニ二。ホ不ホ不本ハ保。ヘ重邊邊邊遍ハ反。と止ヲ登。地地チ千ヲ知。里里李李利黎梨理理。怒怒努努。留留留留畱畱流流累。遠遠を遠越越乎乎。ヲ王ワ日和和輪。ゆ可禾閑賀賀嘉嘉。与与世世。多多多多堂堂堂と太。禮禮礼禮礼礼連。そ曽曽所所楚楚。津津津津徒川川。祢祢祢祢年。京京京奈那那那那那南。羅羅羅羅良。牟牟牟無舞舞舞人无。宇宇。井井井為為。袁袁農濃濃濃濃野能能能能乃乃。於おお於

○ 具九九久。也屋。末波毋満尸寸万
○ 計棄氣氣氣乞希。婦婦婦布
不。古古己。得兄兄。兄亞
氏亭亭亭。阿安。佐左。起伎
喜幾。極遊遊由。免免。見三
美美美。志志之。衛盈惠
恵。飛元元飛。悲比。毛毛毛毛毋母
茂茂茂茂。勢勢世瀬瀬。寿
寿酒須須須須須。叔叔社給
覽覽。泉泉泉泉泉泉

字の類字

○ 以伊已夷意異怡易移翻射嶽五飯○号
路盧炉漏露庐侶論稜○波頗播簸婆破巴
者羽歯盤八半幡魔絆麿磨馬万藤泊槃伐
皤伴末薄判芳端早際速○仁尓而耳尼貳
你弭濔迩児二弐柔于荷丹袁煎仙去負○
保補浦甫本暮褒朋袍煩哀寶抱凡帆穂庐
○反邊遍陛閉鞴謎蔽便辨弊幣別返兵
部背沛陪杯覇征戸舳歴備家應可○止土
徒渡度斗覩都杜圓屠妬途塗努奴怒登東

騰刀鄧等藤得戸門外厠與常椙跡十床昔
鳥利共○知地遅恥馳持治智笞致池撥陳
尼賦泥涅旋乳千血道径路市茅○利里裏
離理梨履黎蜃喇有○奴怒努鴦農濃野主
洛瀛宿夜去塗○留流瑠楼樓魯漏芦盧屢
類累儽有○遠越鳥犀乎恩乙憶袁麻絃小
夫自○和倭話王往涴輪轉吾沫丸回○加
賀可家ケ箇柯舸軻訶河哿荷何架歌伽迎
下閑我鵝餓俄峩蛾階間甲香鹿麌蚊朔彼
芳梶○与與豫預餘余譽肅用容欲夜代世

嗚齷夕吉宵○太陀多柂哆拕娜駄他裏儻
鄧黨田手懶○礼連例攣戀鈴戻黎怜列
有○曽楚蹠祖蘇素叙序緒茹所諸宗層贈
綜藻協鐏俗十衣麻其苑背褻○門川津圖
門都菟苑徒屠途兎逗土豆頭通對追○祢
泥涅年念喜抓鼠宿寐嶺峯姉○奈那南難
納難娜乃儻菜名無勿莫七汝魚嘗寧○良
羅騾囉邏螺来賴乱樂酪涼等○武无無舞
年夢務霧鋒諸六○宇于有羽右雨烏禹紆
胡汙卯浮鵜兎打雲○為違委威圓遺謂位

韋偉蒿居井猪蓋○乃餘農濃廼奴怨之野
○於淤嗚雄餃弘蒭穂尾男士御缶意思呼
○久具穹空貢究矩苦倶句匂匿備狄絢丘
九口鳩寠屢遇愚虞君國来○也耶夜野椰
益射楊屋舎室矢箭八弐弥谷○赤麻麝摩
麝麁馬莽萬間真係鬼参目座暇信檀○計
気希解祁家價既雅夏景鶩鶏矣貉霓藝遣
結概礙导該開梳戒凱皚介毛食消削今笥
○不布婦符府風普扶夫浮賦輔甫歩赴敷
俯譜副冨負否矛鶩部文絃麝踏○己巨古

居湖固舉孤許顧據虚故姑玄菩基枯庫誤
語娛淤其碁期吾吳後黒今粉子児籠乞来
木樹凝胡○江盈衣要延暦潺兄枝柄咲○
天亭傳底弟提豆氐帝諦題挺耐代低屋泥
堅手指出為袖○阿婀安粟庵愛哀鞅足汗
戯○左佐作沙娑猿差散舎社共西蒔射謝
且紫鈔塹邪脊積賞狭障麻幸猿○箋紀喜
寄鬼帰祈伎枳岐企耆棄機気岐祇嗜祁基
騎既貴忌跂妻擬犠蟻義嶬勤巾藝吉宜木
樹来著寸枠械服葱材尅○由油遊猶愈踰

喻孫庚用夕弓湯○女目妻兎命明唎賣昧
謎侮米馬錦梅迷○美未味弥微珥添你寐
尾民靡三見身臣實箕看視水御績○之志
思私姿至時旨璽斯嗣師辭詩試芝始自資
伺子巳茲指尸矢四死士此慈施是司仕寺
紫彩茸餌葺信盡式為石○惠衛會畫穉營
茱永泳曳猿猴褻隈縁○比乖與非菲鄂肥
避毗毗蠻備秘被臂臭鼻彼辟斐蜱肩麼寐
媚美必賓尾檜干乾樋日火氷引○母謀暮
謨慕蒙毛茂朋望閏文問物門勿裳寐藻妹

面喪○之施勢毫芒情酣西筮斉剃牟細栖省
絶瀬湍背脊苔○寸須壽守数種受孺殊儒
蔦輸酒主取周凍詩歌則岑住洲渚酢不簀
簦以上日本記萬葉集あぐらと訓せる歌家多
宮中古訓ふるものあり。書の藻を略きるなり。
抑高城宮めし宮をきるあり。物ゝ篝火なるあり。
訓をとの脚ーー下脚をきるあり。ゆゆしく高殿立所をかの
ごとしーー。所字平仮字のまもは数形なり。又は部ー
古書不用ひる数字。形ふ所を。ちぢらあるざる
ホ仮名のまことぐ〳〵まを。ぐ〳〵人数成をして

之所重し。

和字大観鈔上